【講評】

ミニシアターまる『ごうたと山んば』

子どもの視線がメインの人形劇というのは、ずいぶん久しぶりに鑑賞したように思います。しかも昔話が題材ということで、とても微笑ましく観ていました。大人になるにつれて目を向けなくなり、無意識に切り捨てていってしまったものを再発見したような、そんな気分にさせてくれる愛情にあふれた公演だったと思います。そして一方で、幕間トークで演者の中島さんがおっしゃっていたように、「ひとりで人形を動かし、演じる苦労」もところどころに見受けられました。

この公演で登場する主な人物は、ごうた・その友達ふたり・ごうたの母・山んば。黒い布で覆われた大小のボックスが両脇にそびえる、その間の平らな空間でストーリーが進みます。まずここで思ったのは、客席の会場ホールに対して、演じられる空間と人形が小さすぎることでした。ごうたは村の子どものなかでもずば抜けて体格がよいことが説明され、試しに友達ふたりをまとめて相手に相撲をとる場面がありましたが、少し離れた席からだと、同じ大きさの人形が取っ組み合って何をしているのかわかりにくかったです。ごうたをもう少し大きくデフォルメするなど、会場の空間の特徴と人形のサイズを照らし合わせ、全体を通して視覚的にもう少し個々の人形の個性がわかると良かったなと思います。それを考えると、後半に山んばがゆでられるときに出てくる大きな顔は、空間の広さに負けないインパクトがあり、非常に印象に残りました。ひとりですべてを操るとなると、人形の大きさにも限界はあると思いますが、これからの工夫として考えてみてもらえればと思います。

それから、ごうたに母親が山に行ってはいけないとしつこく言い聞かせる場面や、山んばを鍋でゆで続ける場面など、もう少しコミカルにセリフをやり取りしても良かったのではと感じました。おそらく人形の動きも複雑なので、会話をよどみなく続けるのは難しいところなのかもしれません。しかし、キャラクター通しの会話が途切れがちで無音になったり、うめき声など意味をなさない言葉で間を延々と埋めたりといった瞬間が多かったのはもったいなかったです。絶対に山へ友達を助けに行くというごうたのひそかな固い決意、山んばをうまく騙して鍋に誘い込んだごうたの機転の良さといったものを、もっと会話で盛り上げていけたら良かったです。セリフは関西弁だったので、そうしたやり方には向いていたと思います。

ひとりで何もかもをされているということで、その大変さは想像もできません。しかし、現代を生きる子どもたちが、このように素朴でありながら役者も人形も生命力にあふれた舞台に触れられる機会はとても貴重なのではないでしょうか。これからも子どもたちの心に残る人形劇を届け続けてほしいです。

西惠野（大阪大学演劇学）